



Title	大阪大学看護学雑誌 6巻1号 編集後記
Author(s)	鈴木, 敦子
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2000, 6(1), p. 74-74
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56810
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

編集後記

記念すべき20世紀の最後の年、教育・研究と実践の融合を求めて創刊された『大阪大学看護学雑誌』も6巻を重ねました。よい「看護」を追求するという一つの志のもとに大学と病院に席をおく者が、全国に先がけて協同で創りあげたこのジャーナルは、とても貴重です。ご投稿下さった方々に感謝致します。

目前にある21世紀は、「共生の時代」、つまり助け合いの時代といわれます。このように特徴づけられることの背後には、これまでのものの見方と現在のものの見方に、根本的な違いが起っているように思います。過去、四半世紀、私たちは「進歩」という旗印のもとに高度経済成長のなかを疾走してきました。しかし、いまや私たちは、「何をもって進歩とするのか」、「どれだけ進歩するのか」ということを問いはじめています。さらにまた、これらの問いは、私たち一人ひとりにかかっているということ、つまり「一人ひとりの内面の進歩にしか存在しないのではないか」と気づきはじめています。欧州の社会が、半世紀以上前に指摘しはじめたことへの気づきです。

このような社会にあっては、生と死への関心、日常性つまり生活への関心、個別的・身辺的なものへの関心が増します。また、身体としての快適性、美しさの追求、情感や人情、気分、心が重視されます。このことは、とりもなおさず看護的視点が大切になる時代の到来なのです。さらにいえば、病む人や家族が病氣や苦難にたち向かえるよう援助するだけでなく、この体験のなかに意味を見出すような支援が求められていることなのです。この方向づけには、私たちには病氣が「自己実現」の体験となりうるという確信が前提として必要ですし、それを持つことは難しい課題でもあります。しかし、時代は、病む人の「存在」と「発達」につながる看護の提供を求めるようになることは明らかです。本雑誌も、この力の獲得につながる研究・実践が増すことを切に期待しています。

(編集委員：鈴木敦子)

編集委員会

委員長	小笠原知枝 (大阪大学医学部保健学科基礎看護学講座)
委員	安藤 邦子 (大阪大学医学部附属病院看護部)
	中尾由紀子 (同上)
	谷浦 葉子 (同上)
	荻野 敏 (大阪大学医学部保健学科成人・老人看護学講座)
	鈴木 敦子 (大阪大学医学部保健学科母性・小児看護学講座)
査読	京力 深穂 (大阪大学医学部附属病院看護部)
	原口 範子 (同上)
	中山 弥生 (同上)
	八田かずよ (同上)
	小笠原知枝 (大阪大学医学部保健学科基礎看護学講座)
	阿曾 洋子 (同上)
	鈴木 敦子 (大阪大学医学部保健学科母性・小児看護学講座)
	高木 洋治 (同上)
	原田 徳蔵 (同上)
	山口 雅子 (同上)
	荻野 敏 (大阪大学医学部保健学科成人・老人看護学講座)
	三上 洋 (大阪大学医学部保健学科地域看護学講座)